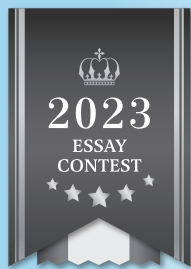


令和5年度 未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール



国土交通大臣賞

ICT を転がせ

くまがい むねひろ
株式会社小野良組 熊谷 宗浩



身動きがとれないまま一夜をその場で過ごし、震えながら迎えた朝、小雪が舞う中自宅までの20 kmの道のりを歩き始めたのは、もう12年も前のこととなります。歩き始めてしばらくすると、私と同じ建設業関係者らしき3人の男性が、道を塞ぐ瓦礫をバックホウで取り除いている姿が目に入りました。

入り組んだ海岸線沿いの町は、1本の道路が寸断されるだけでライフラインが絶たれます。海は流出した重油で焼かれ、誰もがこの町に一体何が起きたのか理解しきれておらず、行政からの要請も行き届いていない段階で、命の道を通すため懸命に作業する姿は、今も目に焼き付いて離れません。ともすれば自衛隊や消防・警察の活躍ばかりがクローズアップされがちですが、ニュースにならない裏側で懸命に作業をしている人たちがいました。その後、私自身も、停止した火葬場の代わりに急遽整備されたご遺体の仮安置場所で、その後再開した火葬場へご遺体を運ぶため掘り起こす作業に従事しました。彼らや私だけでなく、あの頃、繰り返す余震に怯えながら混沌とした目まぐるしく変わる状況の中で、いち早く重機を動かし、瓦礫を撤去し、道を拓いたのは私たち建設業者です。この町を再興に導いたのは、間違いなく建設業界で働く私たちなのです。私は苦しかったあの経験を経て、自然災害が多発するこの日本で、誰かが再び起き上がるために建設業界は必要な支柱であらねばならないと、強く心に誓いました。そして、誰かのために尽力できることを誇り

に思いました。

一方、建設業界は、未だに「きつい・汚い・危険」という悪しき呪縛に囚われています。

仕事に対する「魅力」のうち、災害等から社会を興す「力」、馬力・底力はあっても、人を惹きつける「魅」の部分が欠けているからだとは私と考えています。

では、「魅」を満たすにはどうすればいいのか。

確かに、雨天時や真夏の炎天下での作業は男性でも厳しく、工期が迫り残業が続けば身なりは薄汚れ、下請会社のオヤカタにも怒鳴られ…、そのような経験は私にもあります。これでは若い人たちが集まらないのも頷けます。このまま高齢化が進み離職する人が増えれば、深刻な人手不足に陥ります。

しかし、建設業界は今、変わりつつあります。

震災後私が担当した現場では、施工担当者・事務担当者で相談し合い、カレンダー通りに施工ができるよう、また、長期休暇の前後にはプラス1日～2日休めるよう予め作業日を設定し、積極的に休暇を取れるような仕組みをつくり実践してきました。更に、残業0時間を目標に、作業や役割を分担することで、全員が「残業をしないことが当たり前環境」に慣れ、合理的に現場を進めることが出来ました。

週休二日制の導入、人手不足・高齢化・危険作業をICTで払拭する試みも始まり、女性が活躍できるような推進モデル工事の活用も推奨されています。国は新3K「給与・休暇・希望」を掲げ、

バックアップ体制も整いました。もちろん、建設業界で働く私たち自身も、襟を正していかなければなりません。悪しき風評を放置しておいたのは、私たち世代でもあるのですから。

半ば熱量に動かされて駆け回った日々は過去となり、今、建設業界は大きな転換期を迎えようとしています。そろそろ、未だにまとわりついている建設業界に対する「きつい・汚い・危険」という昭和のイメージを覆す時なのです。

週休二日制の導入でメリハリのついた仕事をすることができれば、休日はゆっくり過ごすことができ心身ともにサッパリする（「きつい」「汚い」がなくなり）、ICTによって合理化された職場環境の中では視えない危険が明らかとなり（「危険」を回避する）、より安全な作業ができる。これからはそういう時代です。そして、過去の実績や経験値にばかり囚われるのではなく、時には若い人の柔軟さから学んでいかなければなりません。若い世代と古い世代が相互に矢印（⇔）を向け合えば、ICTも上手く転がり始めると思うのです。

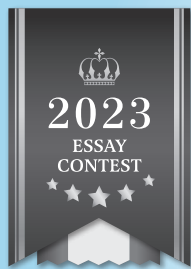
スーツを着てネクタイを締めて現場に出るわけにはいきませんが、iPadを片手に颯爽と現場を

歩き回る姿を子供や若い人たちにってもらいたい。無事竣工を迎えた時のあの達成感や感動を建設業界で働く全ての人たちに一緒に味わってもらいたい。効率化した作業により増えた休暇で、誰もが充実した時間を過ごしてもらいたい。

そして、私はこれから、建設業には自然災害から社会を興す機動力があること、そこで働くということは構造物（「モノ」）を造り上げる達成感を感じられること、さらに最新の技術を使える面白さがあることや余暇を楽しめる充足感があること、他産業に劣らない「魅」の部分が増えることを伝え、未来を生きる人たちのためにバトンを渡す準備を進めていきたいと思っています。



令和5年度 未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール



国土交通大臣賞

私が見た建設業の力・技術



株式会社橋本店 ちば きみと
千葉 君杜

「これからどうなっていくかよく見とけ」これは私が小学4年生の時に起きた東日本大震災で被災し、変わり果てた町を見て建設業界で働いている父が私に言った言葉です。私の生まれ育った町は宮城県本吉郡南三陸町。町の8割が津波にのまれ東日本大震災で被災した地域の中でも特に被害が大きいとされた地域でした。変わり果てた町の姿、絶望する人々、町から去ってゆく人々、人間の脆さ、人同士の争い。当時小学4年生の私にはあまりにも衝撃的な光景と、言葉で言い表す事の出来ないような感情が深く刻まれたのを覚えています。そんな状況の中、余震と再度津波がくる事を考慮し避難場所を移すため内陸へと家族で瓦礫の中を歩いている時でした。私が最初に目にしたのは瓦礫撤去作業を行う建設業界の人々でした。建設用機械で瓦礫を移動し道路を切り開き、私たちの歩く道を作っていました。当時の私にはその道を使って自衛隊の方々が入って来られるようになった事など知る由もなく、ご飯やお風呂、服や布団など衣食住の支援をしてくださった自衛隊の方々すごい。と思うばかりで、そこに確かにあった建設業の力に気づく事ができませんでした。そこから時が流れ私に変化があったのは仮設住宅が町の高台に次々と建設され、避難所生活から自分たちの家へと移り変わる時でした。当時の私が初めて建設業の力をすごいと感じ、認識した瞬間でした。ものすごい数の住居と環境を作り上げ、人々にこんなに感謝される仕事が建設業なのか。と思ったと同時に建設業に憧れを抱くようにな

り、さらに町の変化に人一倍、目を向けるようになりました。それから歳を重ねるごとに徐々に父が私に言った言葉の意味がわかり始めました。町の瓦礫がどうやって無くなったのか、防波堤がどうやってつくられるのか、道路は誰が作っているのか、町全体の嵩上げは誰がやっているのか、山を開き新しい土地を作り建物をつくっているのは誰なのか、全て建設業の力だと自分の目で見て初めて理解する事ができ「町は建設業の力で復興する」と私は確信しました。その時に私のやりたい仕事は決まりました。それは人々が絶望するような状況を変える力がある建設業でした。

それから12年の歳月が流れ、現在私は小学4年生の時に目にした自分の町の瓦礫を移動させ、復興への第1歩目の作業を行っていた建設会社に入社し、まもなく3ヶ月が経とうとしています。現場配属後なにもわからず、職人さん達とも話ができず、先輩に少しずつ教えていただいた仕事をこなす日々で、私の中でのイメージと現実のズレを感じていました。とりあえず「見る事と自ら聞く事」をしてみようと思い、先輩と職人さんが何をしているのか見て、疑問があれば声をかけ「教えてください」と行動するようになりました。すると任せてもらえる仕事が増えたり、職人さんが「現場は慣れたか?」「今日の朝礼良かったぞ」と声をかけてくれたりするようになりました。私の今の仕事は工種ごとに職人さんが行う作業の写真を撮影し、書類としてまとめる事です。その中で見る職人さんの技術力や精度の高さに驚く毎日で

す。しかし私が質問をしたり、話を聞いたりしていると「若い人がいない」「担い手がいない」とよく耳にする事があります。私はこれこそ現在建設業界が直面している人材不足問題そのものなのかと感じさせられました。やはり世間のイメージでは今でも建設業は「3K」のままであり、これから働く人達が憧れる職業としては難しいのが現状だと思います。それでも私は建設業の力に助けられ、憧れ、実際に建設業界で働いている事に誇りを持っています。そこにはより身近で感じた建設業の力、技術力の高さが私をそうさせたと感じています。そんな私には「3K」や「人材不足」などで今の職人達の持っている高度な技術、建設業の持っている力を衰退させていいとは思っていません。東日本大震災の記憶を忘れてはならない

のであれば、あの時に「どのようにして町が復興へと向かったのか」も忘れてはいけないはずで。だからこそ私は今を生きる人々に建設業の持つ力と技術を知ってほしい。「あなたの住んでいる家」「あなたが通っている学校」「あなたが見上げているビル」全て人の手で造られたのです。そこには建設業という大きな力の中に幾万とある職人の技術が詰まっています。そこに興味を持ってほしい。触れてほしい。そのために私は自分が肌で感じた「建設業の力・技術力の高さ」を多くの人へと伝えて行きたいと思います。これから先、建設業に携わる人が増えれば建設業はもっと進化する。私はそう信じてこれからも建設業の力の一部として、建設業と共に進化を続けていきたいと思っています。